



- ・進んで学ぶ生徒(知)
- ・心豊かな生徒(徳)
- ・たくましい生徒(体)

創立50周年 記念式典より

校長式辞より

【前略】 本校は、昭和50年の学区編成により1・2年生のみの生徒数431名で開校いたしました。当時の2年生は、学区編成前の学校の制服であり、様々な制服で学校生活をスタートしました。翌年度の第1回卒業書授与式も、その制服で行っていた記録が残っています。

昭和52年3月5日には、現在の校歌も制定され、その直後の3月15日に挙行された第1回卒業証書授与式には、校歌がどうか間に合ったようです。

当時の校門前には、今のような道はなく、ただ砂利が広く敷かれており、そこを元気に通学する生徒の様子がありました。

学校の周りには、大きな建物もなく、野原がどこまでも広がっていました。学校から西武線の列車も見え、富士山もきれいに見えたそうです。これが50年前の開校当時の様子です。【途中略】



さて、私は、この50周年にあたり、当時のことを資料で調べると共にその当時のことを知る卒業生の方々にお話を伺い調べてまいりました。特に学校の校歌の歌詞には、その学校の考え方や願いが書かれていることから、理解しようとこだわりました。

また、この50周年にあたり、記念事業として何を行うべきなのか、私たちは、悩みました。その結果、テーマを美原中学校の未来を見すえ「生徒自らが美原中学校を維持改善する力の育成」としました。そして、それが学校経営方針にある「未来を切り拓く生徒の育成」そして「本気の笑顔が体験できる美原中学校」につながると考え、事業を開始したのです。

まず、その教材としたのが、丸3年間を要した制服の改定です。

それは、生徒の考えを反映し、現代に合った多様な価値観を可能にする制服です。生徒は、授業や講演を聞いて多くを学びました。学んだ生徒たちによる美原中学校のイメージを、様々な角度からアンケートをとり、制服を着用している生徒たちの考えも反映できるようタブレットを使い、データーをまとめました。学校は、そのデーターを数社のプロの制服業者に送り、本気で美原中学校のイメージを反映した制服のサンプルの作成依頼をいたしました。その結果、夏服も合わせると15着以上の美原中オリジナルサンプルを制作いただいたのです。

更に、このサンプルを使い、生徒の代表、学校関係者、保護者の代表、PTAの方々、そして学校運営委員会の皆さんに参加いただき、この体育館で制服業者による公開プレゼンテーションを実施しました。この企画で、生徒に選ぶことの責任と同時に大人の本気を見せたかったのです。こうして、やっと4着が選ばれました。

その4着は、3学期の始業式後に校長の私がプレゼンテーションを実施した後、約1ヶ月間、展示いたしました。その間、全校生徒が、この4着を観て手に触れ、最後に全校生徒の投票により、決定したのが今回の制服です。

すでにお分かりの方もいると思いますが、この改定に参加した卒業生や在校生は、この制服に袖を通す

ことは、ありません。

50周年の記念に本当に残したかったのは、やはり「生徒自らが美原中学校を維持改善する力の育成」です。制服の改定は、その産物なのです。ですからこの改定に関わった卒業生も含め、生徒たちは、たとえ自分がその制服を着ることが無くても、この学びを通じて美原中の未来を想い、次世代に残した事実を成し遂げたことを誇りに思ってもらいたいです。

次にもう一つの周年事業です。これは、生徒会を中心に行った中庭にある「風致園の復興プロジェクト」です。風致園は、開校10周年の記念事業として学校に寄贈されました。しかし、近年のコロナの影響や年数を重ね人の手が思うように入らず、木が大きく育ち、必要な光を遮ったり、雑草が生い茂るなど厳しい状況下に置かれてしまいました。このプロジェクトは、大人がやるべきことと、生徒ができることを分けて実施いたしました。

そこで私は、生徒がやれることを募りたく、生徒会の公約にあった意見箱に手紙を入れたのです。

それは、生徒に、公約を守ることの大切さと、公約にあげていた生徒のために役立ちたいという気持ちを実現させたかったからです。そして今、「風致園の復興プロジェクト」は、「校章園」の整備も含め動き始めています。風致園には、今、光が降り注ぐようになりました。これまで多くの生徒や行政・地域の方、PTAの協力と行動により、生徒会が作成した「復活イメージ」に近づきつつあります。最終的には、年が明けた3月上旬には、整地された風致園・校章園に全校生徒・教職員の約800人が花を植え、この「庭」を完成させます。ここで、何より大切なのは、この風景を生徒たちの手により、今後も維持することだと考えます。これが、「生徒自らが美原中学校を維持改善する力の育成」事業です。

最後に、校歌の歌詞について触れます。「学びの庭に」と「みどりの庭よ」には、この歌詞を軸に、その前後の言葉と言葉を合わせ、創設にかかわった方々が未来永劫に願う美原中学校のあるべき姿があると理解しました。

私たちは、50周年と言う大きな節目を通じ、その志を引き継ぎ、その証として校歌を歌い、今後も皆さんが美原中学校の礎として活躍することを強く希望し式辞といたします。

令和6年 11月 5日 所沢市立美原中学校長 吉田 和生

校長見聞録

ここには、式典で式典会場の上手（来賓席側）に合った美術部の作品について、説明する。原案者は、美術部 1年6組の岸田彩さんだ。美術部は、美原祭やその他の各行事でもメッセージをのせた作品を制作し、展示している。今回は、その原案をもとに美術部の活動として美原祭の作品と重なりながらの作業で大変ハードな環境で作品を完成した。



私は、この作品への思いが聴きたくて顧問の先生にお願いして聞く機会を得た。以下にその内容を記する。

【**岸田さんのこの作品への思い**】50周年と聞いて何を思うか？まずこの言葉を耳にした時、50年と言う長い時のつながりを思い浮かべました。どうしたら、その史を絵に表せるのかを考え、「春夏秋冬」こそがふさわしいと思いました。大きな画面を4つの差し込む光の筋のように分け、左から春・夏・秋・冬の情景とその校舎を構図にしました。暖かな春の光を受けて咲き乱れる花々、夏のしたたかな甘い雨をあびて青く色を染めた樹、寂しくも日は、早々に沈み、目に映るいつかみた夢のような秋の遠い空、そして、この厳しい冬の寒さを越え、次の春たちを迎えるため、生きる者たちが尽くす力。それらは、私たち生徒の心身が成長し、未来に向かって羽を広げ、次の世代へとつないできた歴史と重ねられると思います。そして、私たちの愛する美原の校舎こそが、この美しい時の流れを映し出し、刻み込んでいくと私は、思います。(原文)

なんとという素敵なメッセージなのだ。中学校1年生の生徒が美原中学校をこのように捉えていると知るだけで校長として、一人の人として、そのような感性に触れたことに大変な幸せを感じる。感謝！！